



第134号

2026年1月24日

◆ 発行 ◆
一般社団法人名古屋労災職業病センター
名古屋市昭和区山手通 5-33-1 杉浦医院 4階
TEL&FAX : 052-837-7420
e-mail : narita@nagoya-rosai.or.jp
<https://nagoya-rosai.or.jp/>



田中奏実さん（35歳）は、18歳だった時に胸膜中皮腫を発症し、左肺と胸膜を全摘出する手術を受けました。発症から17年、中皮腫は治癒しています。

（2025年11月19日札幌市内 関連記事 P2～P3）

134号目次

- ✍️ 長く生きて良かったなって感謝の方が大きかった
18歳の時に中皮腫を発症し克服した田中奏実さん P2～P3
- ✍️ 腹膜中皮腫を発症した男性がニチアスを提訴 P3～P4
- ✍️ 日立製作所笠戸工場におけるアスベスト被害の
損害賠償請求訴訟で和解成立 P4～P5
- ✍️ 間質性肺炎の急性増悪で死亡した男性が石綿肺で労災認定 P5～P6
- ✍️ 中皮腫の闘病をした北村篤さんの著作「希望の道」の紹介 P6～P7
- ✍️ 全国一斉アスベストホットラインを実施 P8

長く生きて良かったなって感謝の方が大きかった 18歳の時に中皮腫を発症し克服した田中奏実さん

札幌市に住む田中奏実さん（35歳）は、2008年、短大1年生だった18歳の時に悪性胸膜中皮腫を発症しました。札幌の病院では手術が出来なかったことから、短大を休学し、母親とともに北海道から静岡県に転居し、静岡がんセンターで辛い3回の抗がん剤治療を受けた後、2009年2月、10時間におよぶ左肺・胸膜全摘手術を受け、その後、さらに30回の放射線治療を受けました。中皮腫は治癒し、現在は一人暮らしをしながら、札幌市郊外のお菓子工場に事務職として勤務しています。プライベートでは、スマートフォンやPCでプレイできる本格的カードバトルゲーム、シャドーバースの公式の大会にオンラインで参加したり潜在意識を使ったカウンセリングの勉強を続けたりしています。シャドーバースのプレイ歴は6、7年に及び、個別戦だけでなくチーム戦にも参加しています。戦い方については情報を集め研究しなければならず奥が深い世界ということでした。潜在意識のカウンセリングを習った先生は、筆者が住む愛知県内の方であると聞き驚きました。

田中さんには、コロナ禍前の2019年10月に岐阜市内で行った中皮腫サポートキャラバン隊の集会で講演をしていただいております。筆者が田中さんとお会いするのはこの講演以来5年ぶりとなりました。講演の内容については、もくれん101号に掲載しましたが、今回のインタビューのために読み返し、特に筆者の心に残ったのは、次のお話しの部分でした。「余命2年と言われたことから「死ぬって何だろう。」と考えたこともありました。夜の病室で目をつむったら真っ暗な世界が広がっていて、何も聞こえなくなった状態、これが死かな」なんて思ったこともありました。そこで私が何を思ったかと言うと「もしも自分の命がここで終わってしまうんだら、自分はどうしたいだろう」、そんなふうに思いました。そう思ったら北海道で帰りを待っている家族や友達の顔が浮かんで来て、本当にただただみんなに対して感謝の気持ちが湧きました」。田中さんのお話しには感謝という言葉が必ず出てきます。

中皮腫を発症してから17年間を生きてきた田中さんが今考えていることを聞きたいと思いインタビューを申し込みました。11月19日、札幌に到着すると少し雪が積もっていました。

インタビューは、水曜日の夕方から札幌駅前のエルプラザで行いました。週末の名古屋～札幌便がほぼ埋まっている状態だったことから平日夜の面談となりました。田中さんには仕事が終わった後をお願いする形になり申し訳なかったのですが快く受けてくださいました。この時、筆者は、10月下旬に受けた甲状腺摘出手術の影響で小さな声しか出せませんでした。なんとかインタビューをすることができました。

インタビューの冒頭、田中さんから「先週、転職しまして」と聞き筆者は驚きました。短大を卒業し、栄養士の資格を得てから10年間、お菓子の品質管理担当として勤務してきた札幌市内の洋菓子屋さんが今年3月に倒産してしまい、倒産した会社の社長の紹介で現在の会社に就職したということでした。パソコン作業が多く、自宅から1時間程かけて地下鉄とJRで通勤をしていますが、通うのにも慣れてきたと話してくれました。お菓子屋さんの倒産は突然で、前日まで普通に営業していたのに、休日だった翌日の土曜日に事務員さんから「明日から会社休みます」と電話で倒産を告げられました。この時のことを田中さんは、「びっくりし過ぎて、意味が分からなくて笑っちゃいましたね」と話してくれました。洋菓子店には、10年間勤務していたことから、雇用保険の失業給付の受給期間が210日間と長くありのんびり過ごそうと思いました。

会社倒産と失業の話聞き驚いた筆者でしたが、病気（中皮腫）について聞いたところ、「7

月に脳梗塞を起こしました」と聞きさらに驚きました。

脳梗塞が起きる3週間前から息苦しい感じがあり、発症前日には、椅子に座っている時に落ちてしまったり、立っていられずに倒れたりして立ち眩みかなと思ったりしていたということでした。体の麻痺は急に起きました。動けないと思い父親に電話をしましたが、「すぐに救急車を呼べ」と言われました。動けなかったので担架で運んでもらい、病院に救急搬送されると医師から脳梗塞ですと言われました。薬で治療しましたが、右の脳の血管が詰まった場所が手足の運動神経をつかさどる場所をかすめたくらいであったことから後遺障害は残りませんでした。直撃であったらまひが残っていたと医師から言われました。脳梗塞の原因は分からないと言われました。この時は、2週間行かないくらいの期間入院をしました。もう治らないのかなと考えましたがすぐに回復しました。筆者が「田中さんにとって大変な年に来てしまいました」と言うと、田中さんから、「今は落ち着いたので全然ですよ」といってもらえたのでホッとしました。

田中さんの中皮腫は治癒していますが定期的に経過観察しています。手術をした静岡がんセンターへは1年か2年に1回行き、札幌の病院では3か月毎に通い採血や画像検査を受け、年に1回全身の検査を受けます。

中皮腫を発症してから17年、今の心境について聞くと、発症した当時は学生で「片方の肺を取ったら30代とかどうするんだろうと思っていましたがなんとかなっているのはありがたいですね」と話してくれました。日常生活で不便なのは息切れで、風呂上りにはすぐに動けません。普通に歩行するのは平気なもの、激しい運動は出来ず、横断歩道を走って渡るとぜいぜいするということでした。階段はなんとか登れるということでした。肺が片方無い生活には慣れたということで、日常生活で中皮腫のことを考えることは無くなりました。今はやってみたいことに意識が向くということでした。再発の可能性について聞くと、「なんかあってもしょうがないなって感じですね。17年生きたら十分かな、ありがたかったかな。脳梗塞の時も本当にもう人生終わったかなと思ったんですけど、でも死ぬ恐怖も全然なくて、むしろこれだけ長く生きて良かったなって感謝の方が大きかった」と話してくれました。

ここに行きたいと思ったらすぐに飛行機に乗って出かけるということで、このインタビューの翌月にも友人と会ったりするため東京、関西、愛知に旅行に行く予定と話してくれました。

田中さんは潜在意識を使ったカウンセリングを学びながら知人たちのカウンセリングを行っています。今後もクライアントの日常生活の改善につながるようなセラピーを行っていきたいと考えています。

(事務局 成田 博厚)

腹膜中皮腫を発症した男性が二チアスを提訴

1971年3月から1976年2月まで二チアス羽島工場に勤務し、パッキンや建材の製造に従事したことからアスベストにばく露し悪性腹膜中皮腫を発症した70代の男性が、病気になった原因は二チアスが安全配慮義務を怠ったことが原因として、同社に対して5452万円の損害賠償を求める訴訟を10月14日に岐阜地方裁判所に提起しました。男性は当センターの会員さんでしたが、提訴後の11月にお亡くなりになりました。発症直後は、腹水が貯留し嘔吐を繰り返し食事が取れない状況が続いていましたが、治療の効果があり2年間程は症状が落ち着いた状態で過ごされていたのでとても残念でした。

この提訴についての記者会見は行っていませんでしたが、提訴を岐阜地裁で調べ物をしてきた中日新聞社の記者が発見されたことから弁護団に連絡が入り報道されました。本訴訟は、

アスベスト訴訟関西弁護団の平方かおる、位田浩、今山武弁護士らが担当しています。

中日新聞の取材に対し、お亡くなりになった男性の奥様は、「主人はアスベストのせいで重い病気に罹ってとても苦しみました。その苦しみは見ていなくても耐えられないほどでした。主人の他にもアスベストのせいで苦しんでいる方は大勢おられると思います。ニチアスは非を認めてせめて被害者の救済に取り組んで欲しいと思います」というコメントを公表しました。

訴訟提訴の前に証拠保全期日があり、岐阜地裁で男性に対する尋問が行われました。筆者も傍聴し、男性のニチアスでの作業状況についてのお話を聞きましたが、建材の原料になるアスベストの袋を鎌で切ってスクリュウコンペアに投入していた話しが印象に残りました。

(事務局 成田 博厚)

日立製作所笠戸工場におけるアスベスト被害の

損害賠償請求訴訟で和解成立

日立製作所笠戸工場（現笠戸事業所）で鉄道車両の製造作業に従事し、鉄道車両に使用されていたアスベスト（石綿）にばく露したことにより悪性胸膜中皮腫に罹患して亡くなった元従業員男性（享年75歳）の遺族が岐阜地方裁判所に提訴した損害賠償請求訴訟において11月26日、被告の日立製作所との間で和解が成立しました。

亡くなった男性は、1961年3月から1979年8月までの約18年5か月間、笠戸工場で鉄道車両の艀装（配管の取付け）作業に従事しました。笠戸工場で製造されていた旧国鉄車両や海外向け鉄道車両の構体の内側には、アスベストが吹き付けられていました。男性は、車両内部での艀装（配管の取付け）作業の際に吹付けアスベストから発生したアスベスト粉じんにはばく露し、また、配管部品の製作時に使用した石綿布等のアスベスト製品から発生したアスベスト粉じんにもばく露しました。

男性は2016年4月に悪性胸膜中皮腫の確定診断を受け、同年8月に業務上疾病として労災認定されました。懸命の闘病を続けましたが、2017年12月27日に亡くなりました。男性は、生前、アスベストユニオンに加入し会社と団体交渉を行いました但未だ解決しませんでした。男性の死後、2019年10月9日に遺族が岐阜地裁に損害賠償請求訴訟を提訴しました。本訴訟は、アスベスト訴訟関西弁護団の位田浩、金奉植、渋谷有可弁護士らが担当しました。

訴訟において被告の日立製作所は、男性のアスベストばく露を否定する主張を展開しました。また、原告が被告に開示を求めたアスベストが使用されていた可能性のある鉄道車両の凶面を適宜に提出することも行いませんでした。原告弁護団は、笠戸工場で男性と一緒に働いていた元従業員から聞き取りを行ったり、送付嘱託、調査嘱託に加えて文書提出命令の申立てを行うことで、笠戸工場で働き、中皮腫や肺がん等に罹患し労災認定を受けた従業員33名に関する下松労働基準監督署の調査資料を入手し分析して工場内における労働者のアスベストばく露状況を明らかにする粘り強い立証活動を進めました。

和解成立後、遺族（被災者長男）が報道機関向けに以下のコメントを公表しました。

「本日、生前の父がどうしても笠戸工場でのアスベストばく露を認めてほしいと訴え続けていたことについて、このような形で結果を出していただきました。長い時間がかかってしまいましたが、ようやく決着がつき墓前に報告することができます。ご協力いただいた皆様には心から感謝いたします。大変ありがとうございました。

父が他界して、もうすぐ8年になります。もし父が中皮腫に罹らなければきっと今でも元

気でいてくれているのではないかと思うと、悲しみは8年前と変わらず私たち家族を苦しめ続けています。父は、多くの方が発症していることを知り、いつ自分が発症するかと恐れる日々、発症してからの苦痛の日々でした。父が肉体的にも精神的にも追い詰められていったことを忘れることはできません。

当時、父と一緒に働いていた皆様は、今お元気であっても、いつ中皮腫を発症してもおかしくないと云えます。会社には、退職後の方を含め可能性がある全ての方に注意喚起を行っていただくとともに、専門病院における健康診断の実施により早期発見を促していただきたいと思えます。どうかよろしく願いいたします。」

あわせて、弁護士は以下のコメントを発表しました。

「関係団体のご支援、元同僚の方々のご協力等のおかげで、鉄道車両製造工場におけるアスベストばく露の事案につき、本日和解に至りました。和解内容を公表することはできませんが、本件訴訟については一応の解決をみました。

日立製作所笠戸工場では、アスベスト健康被害により多数の労災認定者がおり、毎年新たな労災認定が続いています。今後も過去のアスベストばく露による新たな被災者が発生することが予想されます。

被告企業においては、被災者救済の観点からの積極的な対応が望まれます。」

厚生労働省が2024年12月11日に発表した令和5年度石綿ばく露作業による労災認定等事業場の公表によると、日立製作所笠戸工場（笠戸事業所）におけるアスベスト健康被害による労災認定は下の表のように40件でした。

労災保険法支給件数						石綿救済法支給件数	総合計(死亡者数)
中皮腫	うち死亡	肺がん	うち死亡	石綿肺	うち死亡	中皮腫	
25	8	9	1	1	1	5	40(10)

出典：https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_46438.html

(アスベストユニオン執行委員 成田 博厚)

間質性肺炎の急性増悪で死亡した男性が石綿肺で労災認定

昨年1月、アスベスト製品を生産していたニチアス羽島工場に勤務し、退職後の2020年2月に70代で死亡した男性の配偶者の方から相談を受けました。夫は肺の病気で亡くなったが、労災申請をすべきかずっと考えてきたというお話しでした。死亡診断書を拝見すると、直接死因の欄に間質性肺炎とあり、その下の欄、直接死因の原因の欄に石綿肺と記入されていました。ご婦人によると男性は、間質性肺炎の急性増悪で死亡したという説明を病院で受けたということでした。労災遺族補償年金の請求期限まで1か月程の時であったので、筆者はご婦人に、まずは、遺族年金請求書を労働基準監督署に送り、時効を止めてから準備をしましょうと話しました。

男性は、1月下旬、急性心筋梗塞で入院した際、石綿肺により酸素化不良が認められました。退院後も息苦しさが持続したことから2月下旬より呼吸器内科で療養を開始しましたが、症状が悪化し4日後、呼吸不全で死亡しました。

労災保険請求を行うと同時にご婦人に病院のカルテとCT、胸部レントゲン画像を入手してもらいました。そして、2名の医師に読影を依頼しました。

長年、アスベスト関連疾患についての研究を続けてきたA医師は、男性の胸部エックス線写真を読影し、石綿肺1/1に相当する不整形陰影、側胸壁と横隔膜上の胸膜プラークが存在することを指摘しました。また、胸部CTで両側の胸壁と横隔膜に石灰化した胸膜プラーク。胸膜プラークは、高度で胸壁周囲長の4分の1を超えることを指摘しました。

長年、アスベスト関連疾患の患者を診察し続けている B 医師は、男性の死亡直前に急激にスリガラス陰影が進行して胸水貯留して状態悪化していることや、厚い胸膜プラークが目立ち、肺内線維化が存在することを指摘しました。一方で、労災保険請求の経験が豊富な B 医師は、一ヶ月での急激な悪化は石綿肺の増悪とは認められないことがあるとの懸念も伝えてきました。

結果として、男性の石綿肺死は労働災害として認められ認定されましたが、後日、保有個人情報開示請求をして地方じん肺診査医と地方労災医員の意見を見ることができました。

地方じん肺診査医は、画像所見からは特発性肺線維症の急性増悪が鑑別に挙がるが、職業歴および胸膜班の存在からは石綿肺の急性増悪に矛盾しない所見であるという意見で、地方労災医員の意見は、間質性肺炎の急性増悪による死亡は妥当と考えられる。石綿肺が急性増悪を来す例は過去にも報告されており、被災者には石綿肺が既存肺疾患として存在してあり石綿肺の急性増悪が直接死因と考えられるというものでした。

(事務局 成田 博厚)

中皮腫の闘病をした北村篤さんの著作「希望の道」の紹介

.....

冒頭から私事で恐縮ですが、甲状腺がんが見つかり、10月下旬、筆者は甲状腺を摘出する手術を受けました。7時間に及ぶ手術後、点滴を代わる代わる受けながらナースステーション横の観察室で18時間の絶対安静、超退屈時間を過ごした後、朝9時の回診でようやく鼻についた酸素マスクや心電図の電極、パルスオキシメーターの指の電極、両足のフットポンプを外され、左腕に刺された点滴と首の創から3本伸びたドレンをつけたまま病室に戻ることができました。手術後の後遺症で喉の通りが悪くなり食べても飲んでむせまくり、低くかすれたボリュームのない小さい声しかでなくなっていました。入院中に頑張っただけで、むせはある程度収まったのですが、退院後も声のかすれは続き、これが改善するまで相当な期間かかるとのことです。一生懸命声を出すように努めていますが、心もとない状況が続いています。

筆者の手術の執刀医は、移植外科と内分泌外科が専門で慢性腎不全と1型糖尿病に対する腎移植と膵臓移植手術も行っており、入院中、筆者は移植手術を控えた患者さんらと同室になったことから、夫が患者で奥様がドナーというような状況を複数目の当たりにしました。ある男性患者が、移植手術前から入院し、免疫抑制剤を服薬しながら準備をし、移植前日には、機械で数時間かけて沢山の薬剤を首から点滴する様子に驚きました。首から点滴する理由は、腕からだ痛くなってしまふほどの量の薬剤を身体に入れるためです。薬液に空気が入ると機械が発報するようになっており、ピーという音が鳴り響くと看護師さんが走ってきて調整します。夕食後くらいに点滴が始まり、深夜2時まで続くので、ピーっという発報音で何回か同室者も目を覚ますことになります。

手術が終わり、退院までの5日間、筆者は、朝の血液検査や医師の回診、創の処置の時間、朝昼晩の食事以外は全くやることのない状況になりました。ほぼ、病室で一日中過ごさなければならぬ中で、本稿執筆のため、2023年に胸膜中皮腫で亡くなった当センター会員の北村篤さん(享年60歳)の著書、「希望の道」(幻冬舎)を開きました。この著作は、北村さんが大阪府のベルランド総合病院で岡部和倫医師による左肺全摘出手術を受けた後、入院中のベッドの上でタブレットを用いて書き上げ、その後、ご本人が出版の為の打ち合わせを幻冬舎と行っていたことを奥様からうかがいました。北村さんの入院期間は、8か月間の療養期間のうち、4か月間におよび、筆者とは比べ物にならないくらい長かったことから、ベッドの上での時間をどのように過ごすかがとても大切だったに違いありません。希望の道は、

昨年9月、幻冬舎から出版の運びとなりました。

北村さんは、名古屋市内の高校を卒業後、慶應義塾大学経済学部に進学しました。挫折の中にいた時、大学図書館で歯科医師であり思想家の鴨志田恒世博士の著作「深層心理の世界」に出会い、「人には顕在意識と潜在意識があり、常に自分が意識している顕在意識というものは意外と狭く、その下には普段は意識していない隠れた認識が膨大に広がっている。その意識をどんどん掘り下げていくと、他者との意識に繋がっていき、さらに深く進むと、宇宙意識に繋がっていく(24頁)」というような博士の提唱する考えに感銘を受けたことから、定期的に行われていた博士の講座に通うようになりました。大学最後の夏休みを終えた頃に、鴨志田博士の考えを勧めようという人たちで出来た講座の主催者である「わたつみ友の会」に入会し、以後、社会に出た後も活動を続けました。鴨志田博士は、1987年に帰幽しましたが、NPO法人わたつみ友の会は、伝統的日本の心に立ち返り、真の人間性の回復を目指すことを啓蒙するための社会教育活動を現在も続けています。

北村さんは、著作の中で、鴨志田博士との富士浅間神社や九州の鹿児島神宮、霧島神宮、鶴島神宮、青島神宮への研修旅行の思い出や、古事記は日本民族の宝であること等を記述するとともに、日本で生きていく上でやはり日本の文化に沿って生きることが、素直な生き方であると思うと述べています。そして、人として大切なのは他人愛なのだと思うと述べるとともに、最後には、この本はこの世の中で生き苦しさを感ずる人に向けて書いたわけであるが、一番生き苦しさを感じているのは自分かもしれない。自分に向けて問いかけるように書いていたとも述べています。

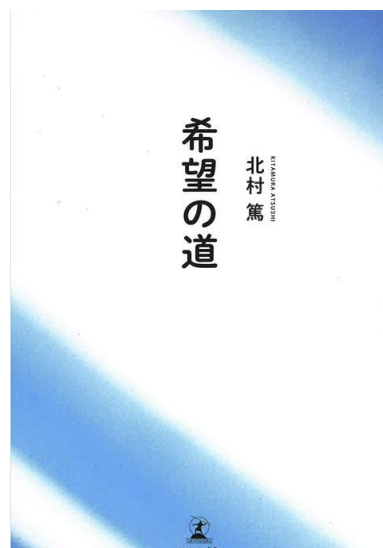
北村さんと筆者の出会いは、2022年の年末に行われたアスベストホットラインでした。お父上が経営していた会社の工場に機械に取り付けられていたアスベストを含有するグラウンドパッキンの交換をしていたことや当時、通院していた愛知県内の病院で手術を受けることへの不安についてお話をおうかがいしましたが、わたつみ友の会の活動についてはお話をおうかがいする機会がありませんでした。この度、奥様から出版のお話を聞き、初めて、生前の北村さんの活動について知ることができました。

北村さんの本にご関心のあるかたは、是非、アマゾンか楽天ブックスでお買い求めください。

発行：幻冬舎

本体価格：¥1,320(税込み)

判型：四六判・104ページ



著者紹介

北村 篤(きたむら あつし)

1963年 愛知県生まれ。慶應義塾大学経済学部卒業。在学中、大学図書館にて医学博士鴨志田恒世先生の著書に接する。深層心理とはいかなるものかに関心を抱き、わたつみ友の会に入会。以後、会の活動に参加する。卒業後、製粉会社に勤務。愛知に戻り、実家の工場にてメンテナンスに従事する。2023年帰幽。(事務局 成田 博厚)

全国一斉アスベストホットラインを実施

12月18日（木）から19日（金）まで全国一斉アスベスト被害ホットラインを中皮腫・アスベスト疾患・患者と家族の会が実施しました。東海支部が置かれている当センターでは、会員の藤本不二子さん、平田勝久さんに応援をしていただき実施しました。ホットラインは、東京、神奈川、名古屋、大阪、福岡等のポイントで行われましたが、名古屋のポイントには二日間で60件の電話が愛知、岐阜、三重、静岡、福井、石川、富山、新潟、長野からありました。全国では176件ありました。現在、各地に出張をして相談をフォローしています。

名古屋では、ホットライン当日NHKの取材を受けました。中日、岐阜、静岡、福井、北國、北日本、新潟日報、信濃毎日にはホットラインの告知が掲載されました。かつて他社の岐阜支局にいて現在は信濃毎日新聞に転職したお世話になったN記者より「懐かしかったです」とお電話をいただき筆者は嬉しく思いました。

患者と家族の会は、毎年、厚労省の労災認定事業場情報公表の時期に合わせ、いまだに増え続けているアスベスト被害者の救済とアスベスト問題を世の中によく知ってもらうためにホットラインを行ってきました。

今回のホットラインには、アスベスト保温材を施工したり解体する仕事をしていて肺がんになったが、勤務していた会社が倒産してしまっているという相談や、保温工事会社を営んでいて肺がんを発症した父の建設アスベスト給付金の通常申請をしたいがどうしていいかわからない、浅野スレートの下請けで工事をしていて肺がんを発症したが、親方はすでに亡くなっている、長年、大工をしていたが、がんでもないのに胸水が溜まったなどの相談が寄せられました。
(事務局 成田 博厚)

《事務局から》

本年もよろしくお願いたします。専従者の成田は、とても元気ですが、病気の治療のため時々事務所を抜けることから、皆様にご迷惑をおかけしますが何卒ご容赦くださいますようお願いいたします。

センターの活動

2025年11月		2025年12月	
5日	全国安全センター会議	18日	アスベストホットライン
27日	東海外国人支援ネット会議	26日	センター理事会

【会費・カンパ振込先】

郵便振替 口座番号 00800-7-219145
加入者 一般社団法人名古屋労災職業病センター

発行 一般社団法人名古屋労災職業病センター

発行者：森 亮太

名古屋市昭和区山手通 5-33-1 杉浦医院 4階

Tel./Fax.052-837-7420

e-mail: narita@nagoya-rosai.or.jp

<https://nagoya-rosai.or.jp/>